

P-7 経年的に観察した低位乳歯の1症例

○高見由佳 副島嘉男 小副川和子  
本川 渉

福岡歯科大学小児歯科学講座

低位乳歯とは、隣接する乳歯を結ぶ咬合平面もしくは辺縁隆線の高さより低位の状態に変化したものを呼んでいる。低位乳歯に関する報告は過去にも多数認められるが、それらの報告では、歯牙が歯肉縁上にみられる位置までのものがほとんどである。今回演者らは2歳4ヵ月男児において、一度萌出していた左側上顎第一乳臼歯が、経年的観察の結果歯肉縁下まで低位化し、埋伏状態になった症例に遭遇したので報告する。

患児は歯牙の欠損を主訴として、2歳4ヵ月時に本学小児歯科外来を受診。この初診時の口腔内所見は、EBA|ABDE, E|Eという状態であった。家族歴に特記すべき事項はなく、全身状態も良好であった。既往歴として、1歳9ヵ月時に火傷を負い、某病院に4ヵ月間入院しており、その入院中に歯牙の脱落を認めたということであった。

初診時には萌出していたDが経年的に観察した結果、1年後には歯冠の2/3が埋伏しており、その後、徐々に低位下し5年4ヵ月後には歯肉縁下にすべて埋伏してしまったので抜歯を行った。X線所見では、患歯の歯根膜腔および歯槽硬線は明瞭ではないが、根尖が吸収を開始しているのが認められた。また、抜歯時の臨床所見からはankylosisを起こしていたのではないかと考えられた。他の萌出歯牙に関しては、異常所見は認められなかった。低位乳歯の原因については、癒着（骨性癒着）、異常な咬合圧、外傷、代謝障害（歯根膜の局所的な代謝障害）、萌出力の不足などさまざまなことが述べられているが、今回は火傷のストレスからくる異常な咬合圧が火傷の治療中にかかりDに関しては歯根膜腔組織に異常を生じankylosisを生じたのではないかと考えられる。又、他の脱落歯に関しては同様の理由で動揺し脱落を生じたのではないかと考えられる。又、病理組織標本による検索も行ったので合わせて報告する。

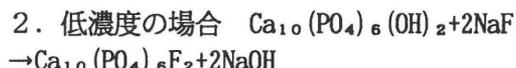
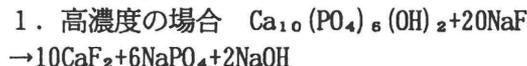
P-8 フッ化ナトリウム配合の歯磨剤について

○古賀裕子、山本廣次、中島 勝

ビーブランド・メディコ・デンタル研究所

目的：フッ化物配合の歯磨剤を用いて、歯質の強化によって、齲蝕の発生及び進行の予防を行なう。

対象及び方法：対象はフッ素濃度100PPMのキャナリーナ歯磨100は主に子供に、またフッ素濃度900PPMのキャナリーナ歯磨900PWは大人を対象に用いる。方法としては、キャナリーナ歯磨100とキャリーナ歯磨900PWの両者ともフッ素イオンにより歯質の強化を行なうが、フッ素の歯質に対する反応は高濃度の場合と低濃度の場合とで異なるが、キャリーナ歯磨900PWは高濃度フッ素に相当し、キャリーナ歯磨き100については、低濃度フッ素の反応を示す。各々、フッ化ナトリウムの歯質に対する反応式は下記の如くで、



結果及び考察：高濃度の場合、フッ素イオンが歯のカルシウムに作用して、フッ化カルシウムを作り表層に沈着し、次に表層のフッ化カルシウムからフッ素が徐々に下層のハイドロキシアパタイトのOHと置換してフルオルアパタイトとなり歯質を強化する。低濃度の場合は、フッ化カルシウムを作らずに直接フルオルアパタイトとなり、歯質を強化させ齲蝕の予防を行なう。